2008年度後期情報リテラシー実践ⅡAB授業評価報告

基礎教育センター・教授
永井　正洋

はじめに

本稿では、2008年度、後期末に行った、情報リテラシー実践ⅡABに関しての授業評価アンケート（SE，TE）の結果を報告する。また、過去4年間の科目別満足度も取り上げ、経年変化を示す中で、今後の科目の方向性について若干述べる。

授業評価アンケートは、昨年度と同様の質問項目にて、引き続きNetwork-learningシステムを回答方法として用いて行われた。

方　法

以下の様に授業評価アンケートを実施した。

実施時期：2009年1月5日～2月5日

学生による授業評価（SE）：

対象：首都大学東京 情リテⅡAB受講者

回収数／人数：523／622人（84.1%）

方法：BlackBoard（25クラス）
　　マークシート（0クラス）

教員による授業評価（TE）：

対象：首都大学東京 情リテⅡAB担当教員

回収数／人数：25／25人（100%）

方法：BlackBoard（25人）
　　マークシート（0人）

結果と考察

まず、図1の「SE回答の度数分布」を見ると、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせて7割を超えている質問項目は、「問1：態度」、「問2：意識」、「問3：説明」、「問4：対応」、「問8：満足」、「問11：チューター」であった。これは、学生自身が意欲的に授業に取り組んだと認識していると共に、教員やチューターといった指導する側の対応も良かったと捉えていることを示しており、学生側の意識としては、指導する側と指導される側の関係が良かったと見ていることを示唆していよう。しかしながら、授業外の学習時間に関しては、9割を越える学生が、1時間に満たない学習時間であると答えると共に、約半数の学生が、学習時間を0時間と回答しており、授業中の良い学習環境や学習意欲が時間外に接続しておらず、昨年と同様、問題である。

次に図2、表1を見ると、満足群と非満足群とで、SEの質問項目別の平均に差が大きかった上位2つは大きい順に、「問3：説明」（1.31）、「問7：成果」（1.14）、である。このことからは、学生の理解を導く授業を構成し、その結果、知識や能力を獲得できたと感得させることが、学生の満足度に何らか影響を与えていることが分かる。

また、TEの質問項目別の平均であるが、図3、表2において、満足群と非満足群で差が大きいのは、「問11：チューター」、「問1：態度」、「問6：成績」であり、クラスによってチューターの資質、学生の学習意欲や成績評価法の周知という点で、教師の認識に違いがあることが分かる。その結果、全体の満足度にも差異が表出しているのではないかと推察される。ここで、チューターに関しては、情報リテラシー実践Ⅱの各科目が、Ⅰよりも専門性の高い授業内容となっていることから、学生対応が増えると共に、教師からの要求も多くなる。したがって、チューターの授業への影響力も大きくなるが、その評価が全体の満足度にも反映される結果となったのではないかと考えられる。

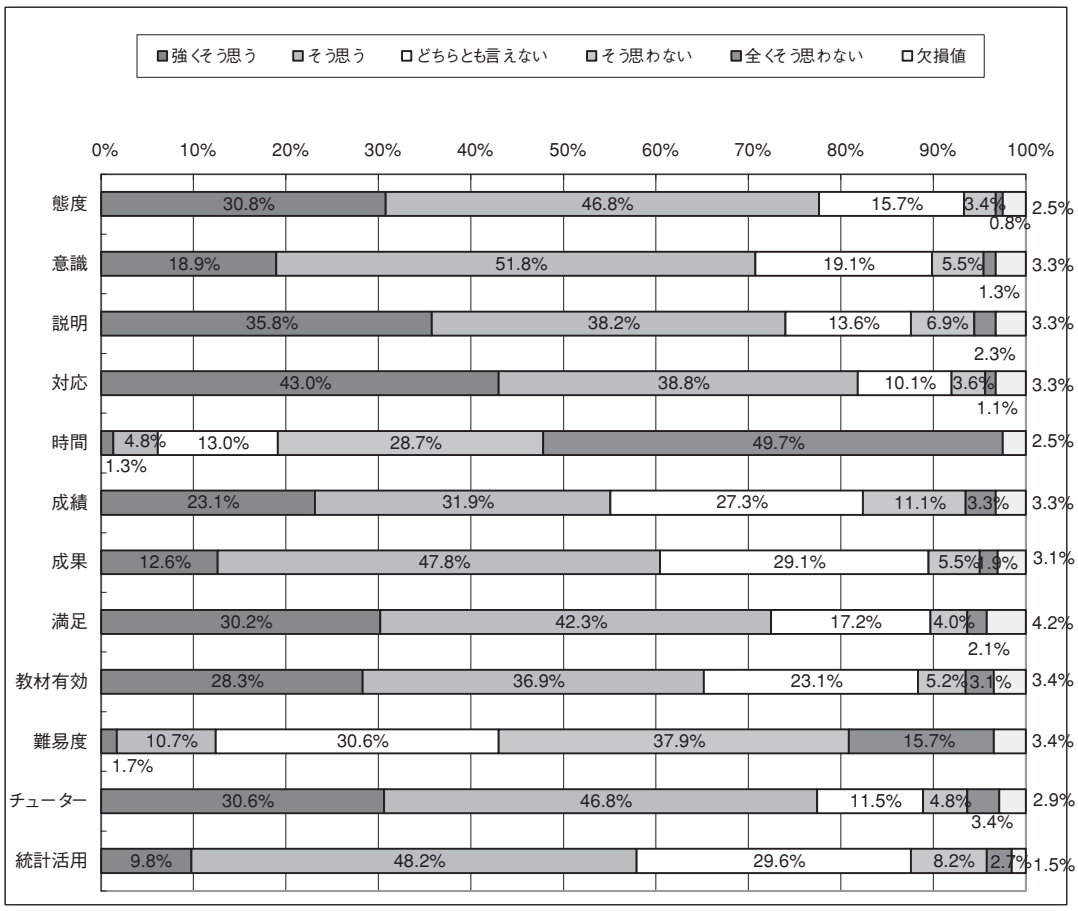


図1　SE回答の度数分布

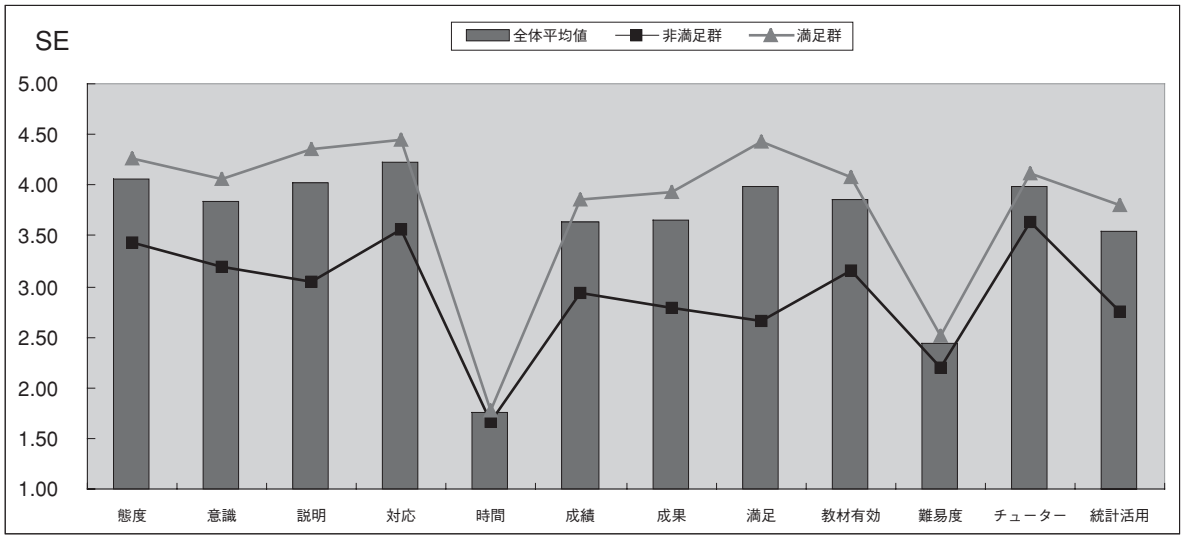


図2　満足度別の平均値のグラフ（SE）

SE	*N*	態度	意識	説明	対応	時間	成績	成果	満足	教材有効	難易度	チューター	統計活用
全体平均値		4.06	3.84	4.02	4.23	1.76	3.63	3.66	3.99	3.85	2.43	3.99	3.55
標準偏差		0.83	0.85	1.01	0.87	0.95	1.07	0.85	0.93	1.01	0.95	0.98	0.88
非満足群	*122*	3.44	3.19	3.04	3.56	1.66	2.93	2.79	2.65	3.15	2.20	3.63	2.76
満足群	*379*	4.26	4.06	4.35	4.45	1.78	3.86	3.93	4.42	4.08	2.51	4.12	3.80

表1　満足度別の平均値（SE）

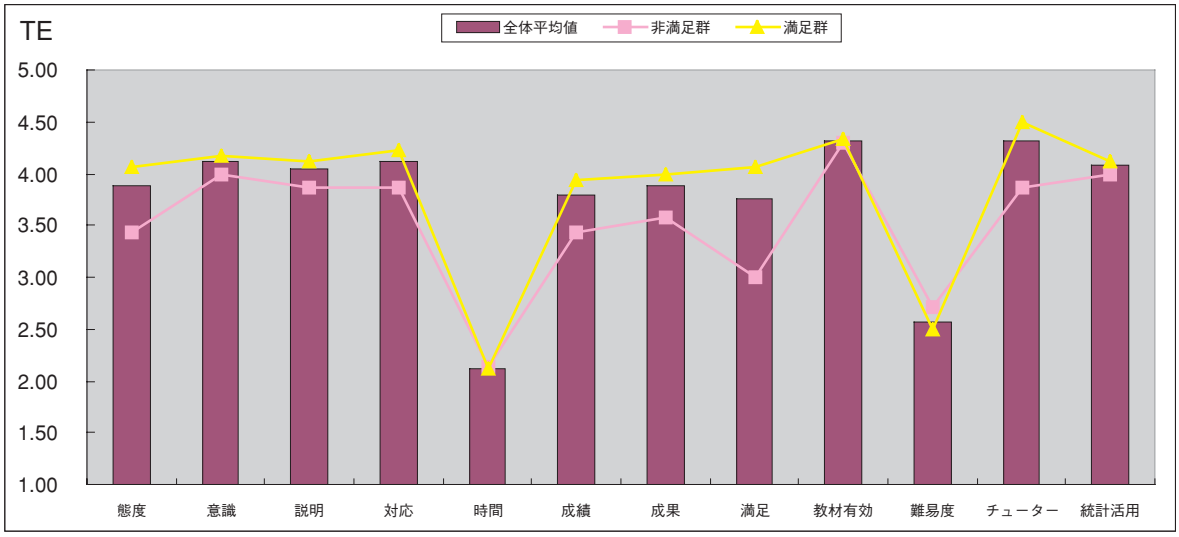
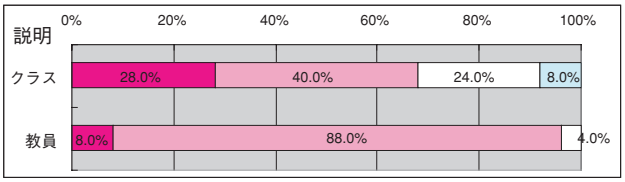


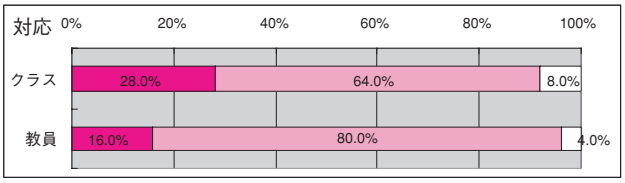
図3　満足度別の平均値のグラフ（TE）

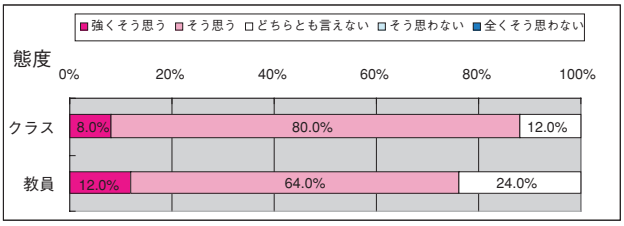
TE	*N*	態度	意識	説明	対応	時間	成績	成果	満足	教材有効	難易度	チューター	統計活用
全体平均値		3.88	4.12	4.04	4.12	2.12	3.80	3.88	3.76	4.32	2.56	4.32	4.08
標準偏差		0.60	0.33	0.35	0.44	0.78	0.82	0.44	0.52	0.48	0.51	0.95	0.28
非満足群	*7*	3.43	4.00	3.86	3.86	2.14	3.43	3.57	3.00	4.29	2.71	3.86	4.00
満足群	*18*	4.06	4.17	4.11	4.22	2.11	3.94	4.00	4.06	4.33	2.50	4.50	4.11

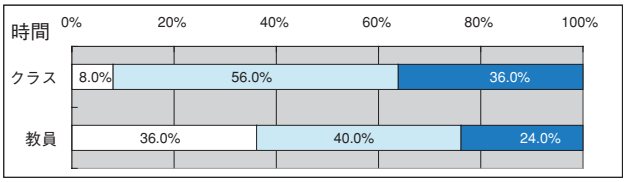
表2　満足度別の平均値（TE）

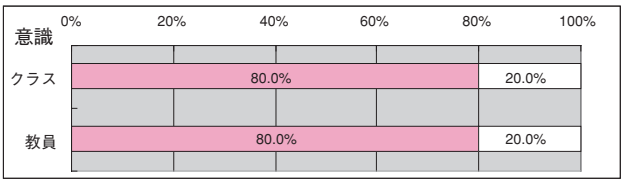
次に、図4で示される「クラスデータとTEデータの比較」について、述べたい。「5：強くそう思う」＋「4：そう思う」の割合が、教員の方が上回っている項目数は、10質問項目中、7項目である（項目5、10は除いた）。これは例年と同様、教員の授業に対する認識と学生のそれとの違いを示しており、教員の方が比較的高く自身の授業を評価しているのに対して、学生は若干、低い評価をしている。

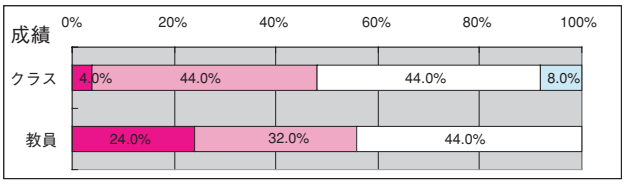












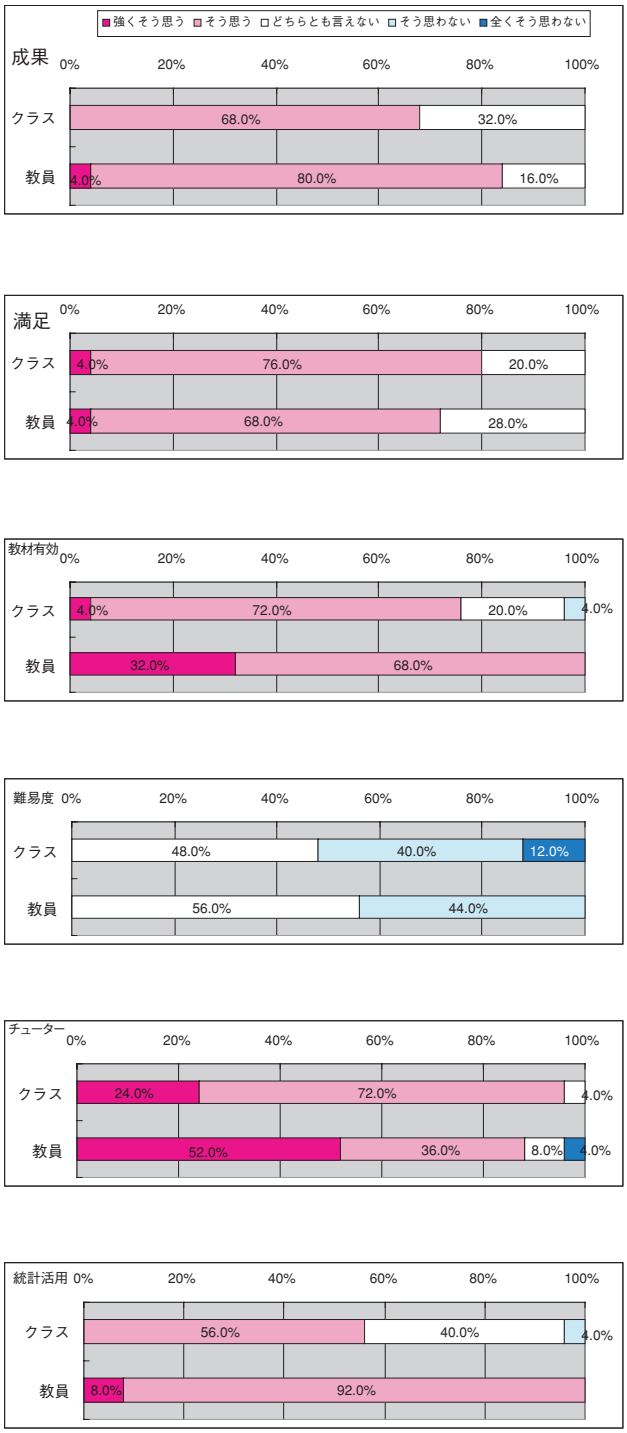


図4　クラスデータとTEデータの比較

最後に表3は、2005年度～2008年度までの情報リテラシー実践ⅡABの満足度の変化である。

	2005	2006	2007	2008
ⅡA	3.34	4.02	3.93	4.08
ⅡB	3.34	3.87	3.69	3.88

表3　ⅡAB別満足度の経年変化（SE）

ここ3年間、極端な変化を示しているとは考えられず、比較的、安定した評価の受け方と推察される。このことと、前述したように学生の意識における学習意欲と教員の指導の関係は、概ね良好であったから、今後これを維持していくと共に、情報化社会のニーズに即応した学習内容の精査を行うことが検討課題となろう。